愚考考古学（二五）

おがくず談義

中林幸夫
（会員　香川県綾歌郡国分寺町）

現代の子供達は知らないが、家庭に冷蔵庫の無かった時代、病人が高熱を出すと、頭を冷やす水枕に入れる氷を氷屋に買いに行く。すると氷室を開けて、おがくずの中から氷をとり出して、おがくずまぶれの氷を藁縄で括ってくれたものだった。

おがくずは、断熱、保温、吸水等の効果があることから、野菜等の貯蔵や家畜小屋の床敷に使われていた。

おがくずと云う呼び方は、随分古くからだと思われる。そこで、最近、若い大工さんに、鋸くずのことを何故おがくずと呼ぶのかと意地悪な質問をしたところ、理由は知らないとのことであった。

私の職場に大神さんという人が転入して来たとき、書類を見て、おおがみさんと呼んだら、「おおがみ」でなく、「おおが」だと云われた。

彼は宇佐近辺の出身の人であったが、栂牟礼城主であった佐伯惟治のことや惟治縁りの竜護寺、富尾神社のことをよく知っており、「富尾神社の大祭に招待されたこともある。」と話していた。

私は、おがくずのおがと大神氏のおがに何か共通点がありそうに思えてならない。

佐伯の歴史を語るとき、佐伯惟治を語らなければ、佐伯の歴史ははじまらないが、栂牟礼城主佐伯氏の出自は豊後の大神一族であるといわれている。

それでは、大神氏の出自はと歴史書を調べてみると、七～八世紀の日本の政治、皇位等の問題に神託をもって関与していた宇佐八幡宮の祭司である。

宇佐八幡は、耶馬台国の卑弥呼ではなかろうかと論ぜられて

いるように、シャーマン的な力をもっていて、当時の政治に重大な託宣を与えていた。

中でも、聖武天皇の大仏建立についても何かと関与し、天平勝宝元年（七四九年）には東大寺の大仏鋳造が完成、都へ行って大仏を見るべし、との神託により、八幡宮の女禰宜大神杜女と甥の主神司、大神田麻呂が上京、都に滞在中、皇位継承問題にからむ、「厭魅事件」（鬼道の呪術＝人を呪い殺すため、人形を作って手足をしばり、心臓や眼にクギを打ち込んで呪詛する陰険な手法）が発生して杜女は日向へ、田麻呂は種ケ島へ配流され、八幡宮の実権は、大神氏から宇佐氏に替った。

しかし、天平神護二年（七六六年）には召還されたことと、皇位継承問題での道鏡にからむ和気清麻呂の神託事件は有名である。

宇佐八幡は、大神氏の奉ずる八幡神と宇佐氏の奉ずる比売神の二つが合体したものとされており、比売神の方が、宇沙都比古、宇沙都比売の流れをくむ在来神として古く、八幡神は後発の外来神といわれている。

このような合体神であるため、幾度となく宇佐氏と大神氏は勢力争いを起こしている。

大神氏の伝承には、日向国と豊後国境にある祖母山の大蛇婚の話もある。

昔の姓氏には機織に関係ある、綾氏、織部氏等があることから、大神氏に思えることは、建築関係の一族ではなかったかと思われることである。

昔、大工のことを番匠と呼んでいたようであるが、それ以前には、おが又はおおがと呼んでいたのではないだろうか。

弓削道鏡（生年不詳～772）

おがくずのおがを調べてみると大鋸のことを「おおが」と呼んでいた。（辞書にも大鋸は、おおが又はおが）

―呼び方では、大鋸と大神は同じ発音である。

―大鋸は古い時代の中国大陸で作られたといわれており、工の字形の木枠に鋸身を張ったもので、二人で双方から押挽きする形式のものであった。

現在使われている一人挽きの鋸ができたのは江戸時代になってからと云われている。

外国では押し挽きの名残りが続いており、引き挽きは、我が国での改良で、横挽き鋸、縦挽き鋸、散目鋸、丸鋸へと改良され発達して行った。

製材所の無い時代は、大木から柱や板を作ることは大変な作業で、製材に関係する人を木挽き、杣人、と呼び、木造建築の重要な職業と見ていた。

佐伯市樫野の仏像を調べたときも棟札に、

大工　甚蔵

木引　利吉

と書かれていた。

このような愚考を推理していると山深い祖母山の大蛇婚の伝承も、杣人なら関係のあることで、大神氏は最初に大鋸を持ち我が国で使った一族であったのかもしれないと思ったりもする。

チェンソーと電気鋸で木を切る今日の人達には、昔、山深いところで木挽き唄をうたいながら木を切った人達の心情を理解することはできないような気がする。

私の愚考、大神さん達はどう思いますか。

夏雲の輝やき遠く祖母の峯